

図8 トレンチ2・⑨層出土遺物実測図(2)

遺構面を覆う⑨層下位の堆積にはVI期の土器が包含されていることから、VI期を下限とする遺構面と考えられる。

#### 第4遺構面(図6・表2)

⑩層上面で検出した遺構面である。東から西に向かって緩やかに傾斜しており、東西の高低差は約0.9mである。最も標高の低いトレンチの西側にピット群が認められる。ピットはいずれも小規模で、規則的な並びは確認できない。遺構面を覆う⑩層下位の堆積にはV-1期の土器が包含されており、V-1期を下限とする遺構面と考えられる。

#### 第5遺構面(図6・図10・表2)

⑫層上面で検出した遺構面である。東から西へ向かって緩やかに傾斜しており、東西の高低差は約1mである。標高の最も高いトレンチの東側に不整形なピット群が群集しており、トレンチの中程に土坑1、最も標高の低いトレンチの西端に落とし穴とみられる土坑2がある。なお、ピット群は⑩層に覆われており、新しい時期のものである可能性も比定できないが、埋土の色調等から第5遺構面に伴うものと判断した。

トレンチ中程にある土坑1(図10)は、南北に長い不整な長楕円形を呈し、溝の一部の可能性もある。検出規模は長さ1.3m、幅0.5~0.7m、深さ0.3m、断面形はU字形を呈している。埋土は1層で、遺物は出土しなかった。

トレンチ西端にある土坑2(図10)も一部がトレンチ北壁にかかっている。土坑の直径が1.1m程度で、平面形

は円形または楕円形を呈すとみられる。断面形は緩やかな袋状で、底面に逆茂木の痕跡と思われる小ピットがあることから、落とし穴の可能性が考えられる。土坑内には3層の堆積が認められるが、遺物は出土していない。

なお、遺構面を覆う⑩層からも時期を特定できる遺物が出土していない。しかし、これまでの調査で検出されている落とし穴状の土坑には縄文時代後晩期の土器片を伴うものがある。一方、確実に弥生時代に位置付けられるものは認められない。したがって、ここでは縄文時代晩期以前に遡る遺構面と考えておく。

#### (3) 小結

T2では縄文時代後期以降、現在に至る堆積と遺構面が確認できた。しかし、ここに観察できる堆積は不断のものではないようで、以下、述べるように、不自然な堆積の欠落が少なくとも2カ所に認められる。

まず1つは、⑨層と、⑨層上に堆積する②~⑧層の関係である。ここで問題になるのは、近現代の堆積である②~⑧層と、古墳時代前期までの堆積である⑨層の間に、古墳時代中期以降の堆積が認められないことである。近現代に里道が敷設されたさい、古墳時代中期以降の堆積が削平されている可能性がある。

2つめは、⑩層と⑪層の関係である。⑪層の堆積時期ははっきりとしないが、⑪層に覆われる第5遺構面には落とし穴と推測される土坑があるから、縄文時代晩期以前に遡る蓋然性が高い。したがって、第5遺構面上に堆

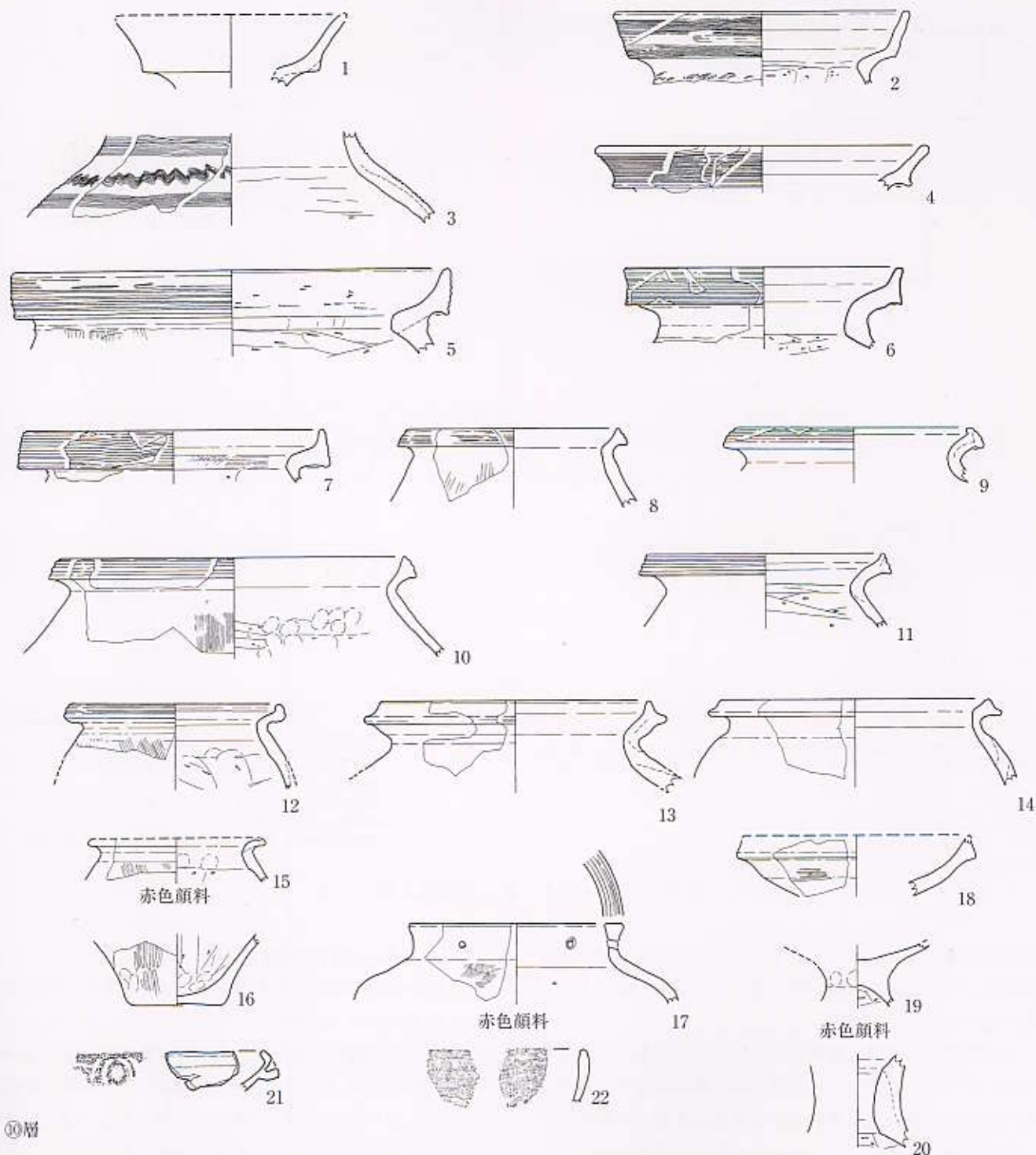
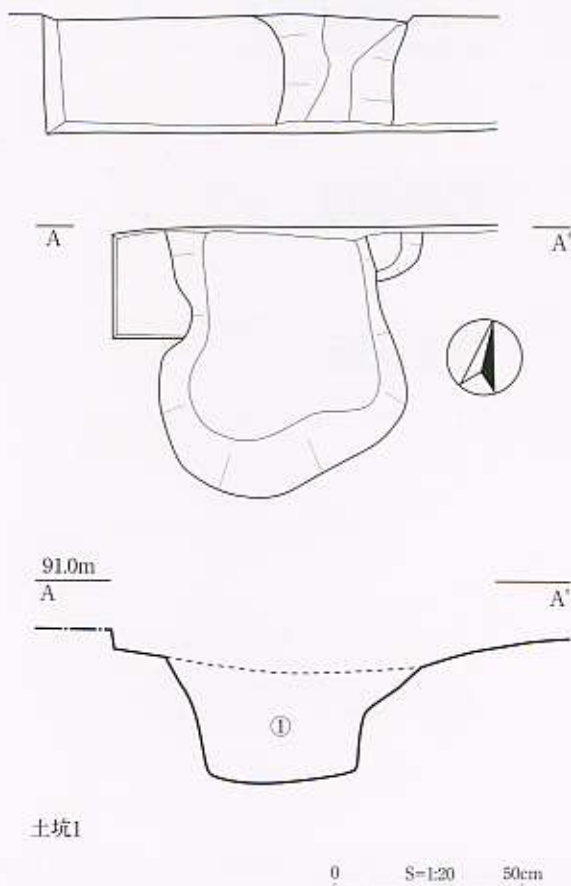


図9 トレンチ2・⑩層・⑫層・排土出土遺物実測図(3)

積する⑩層はそれ以降の堆積と考えられる。一方、⑩層上面に形成されている第4遺構面はV-1期を下限とする遺構面と考えられる。すると、⑩層は少なくとも縄文時代晩期以前からV-1期におよぶ長期間の堆積という

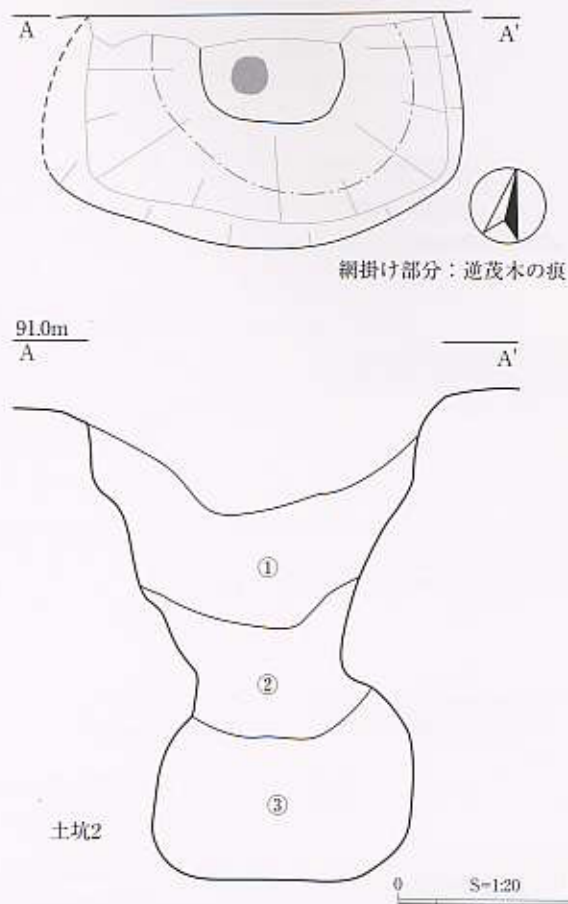
ことになる。しかし、常に同じように堆積が進まないにしても、数百年を経過した堆積には少々薄く感じられる。また、トレンチの東側には⑩層や⑫層がみられず、ローム層である⑬層を直接⑩層が覆っている。こうした





土坑1

①黒褐色土層 (Hue7.5YR2/2) 炭化物を微量に含む。②と同一層。



土坑2

①極暗褐色土層 (Hue7.5YR2/3) 粒子が細かく、粘性がある。炭化物を含む。  
 ②黒褐色土層 (Hue7.5YR2/2) 粘性があり、ややしまっている。炭化物を含む。  
 ③黒褐色土層 (Hue10YR2/2) 粘性は強いが、比較的軟らかい。炭化物を微量に含む。

図10 トレンチ2 第5遺構面土坑1・2

状況を考慮すると、V-1期を下限とする第4遺構面形成時に、それ以前の堆積が削平されている可能性も考えられる。

ここで想定した第4遺構面形成時における削平行為は仮説にすぎないが、V-1期は、妻木晩田遺跡が後期後葉にピークを迎える大規模な集落形成が本格的に始動する段階であり、別途、その検証が必要となろう。周辺の発掘調査やボーリング調査の成果も加えながら、谷部近い土地利用の変遷やあり方の実証的な解明が望まれる。

#### 4. トレンチ3 (T3) の調査

妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部に面した妻木山側緩斜面に設けたトレンチである (以下、T3)。等高線にほぼ直交するように3×20mの調査範囲を設定し、調査の過程で西側を一部拡張した。調査地は南から北へ傾斜するが、トレンチ中央付近で傾斜は緩まり、平坦な地形となる。現地表面の南北高低差は2.2mである。

#### (1) トレンチ内の堆積 (図11)

調査範囲には約0.2m程度の表土が堆積している。表土下にある②層 (黒褐色土・Hue10YR3/2) は、T2・②層との対応関係から近現代の堆積と推測される。V-1～3期の土器 (図12-1～5)、縄文時代後期中葉の緑帯文土器 (図12-10)、時期不明の土製品 (図12-11) や土錘 (図12-12) が出土した。

③層 (黒褐色土・Hue5YR1.7/1) はトレンチ内の所々にある薄い堆積で、④層上面にある第1遺構面を覆っている。V-2・3期の土器 (図12-13～15) が出土しているが、T2・⑨層と対応する可能性が高く、古墳時代前期を下限とする堆積と考えられる。この他に縄文時代後期中葉の緑帯文土器の胴部片 (図12-16・17) が出土した。

上面に第1遺構面が形成される④層 (暗褐色土・Hue10YR3/4) からは、V-1期ないしはV-2期の土器が出土しており、T2・⑩層に対応すると考えられる。

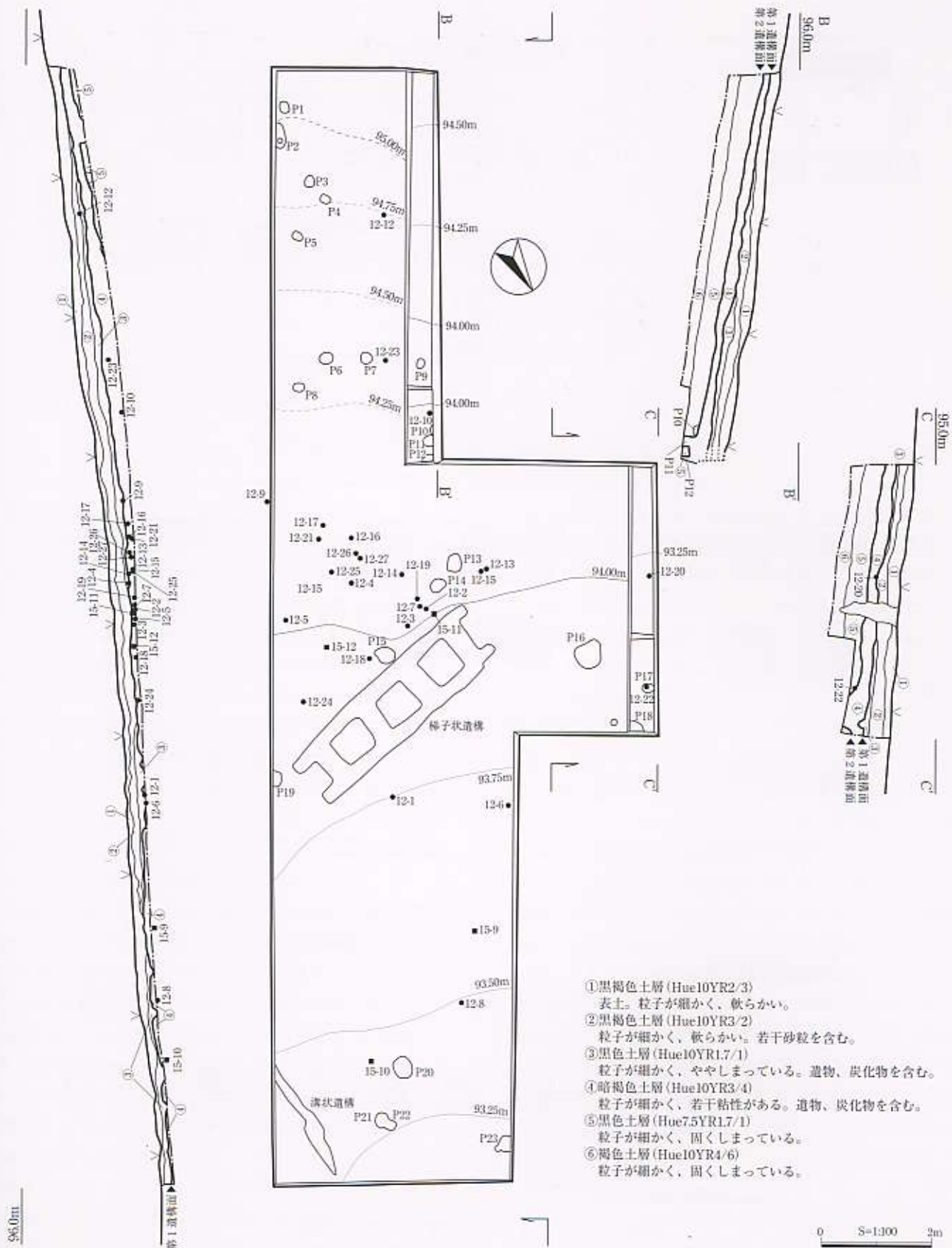


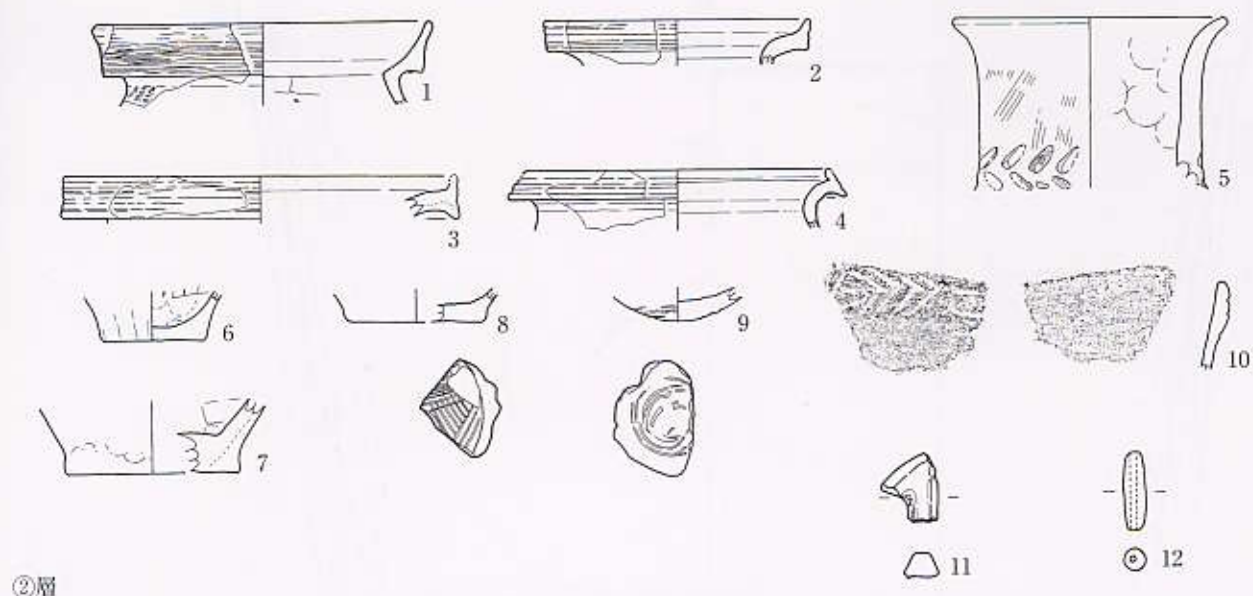
図11 トレンチ 3

⑤層 (黒色土・Hue7.5YR1.7/1) はクロボクの堆積で、⑥層および第2遺構面を厚く覆っている。遺物は出土していないが、T2・⑫層に対応すると考えられる。なお、

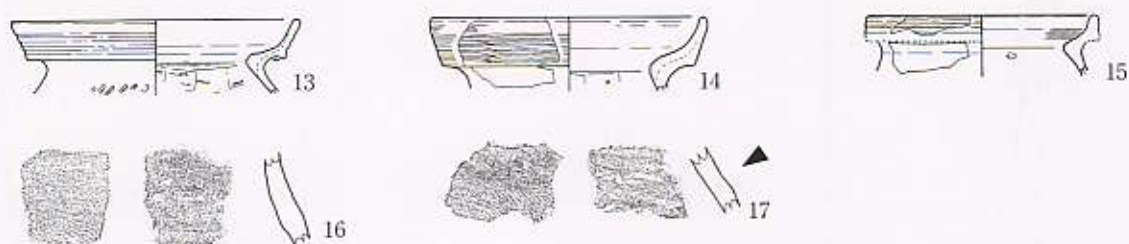
T3にはT2・①層に相当する堆積がなく、⑤層は、T2・⑩層に対応するとみられる④層に覆われている。

⑥層 (褐色土・Hue7.5YR4/6) はT2・⑬層に対応す

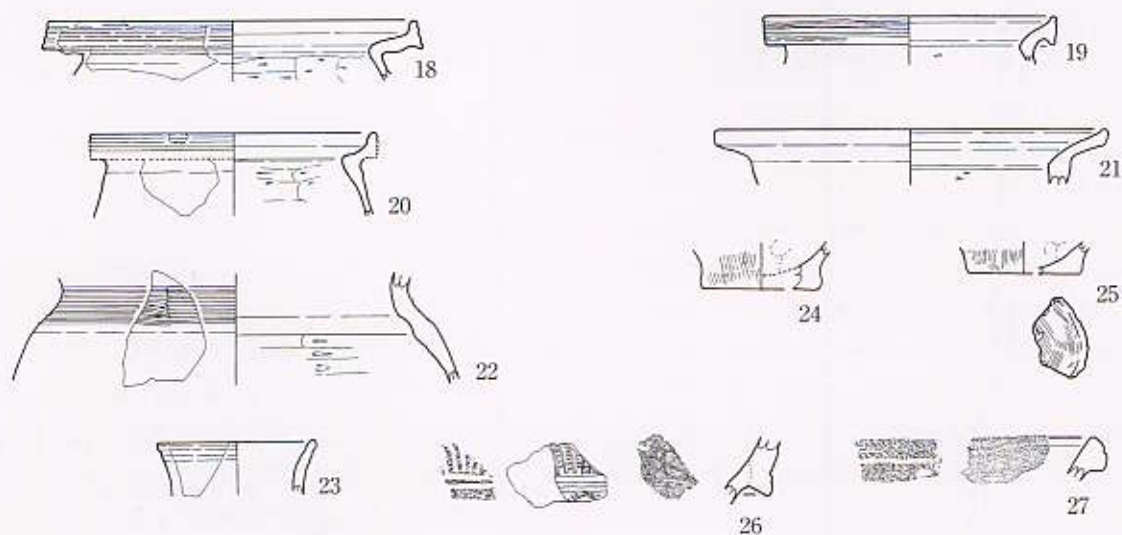




②層



③層



④層

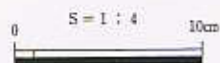


図12 トレンチ3 ②~④層出土遺物実測図

るロームの堆積である。

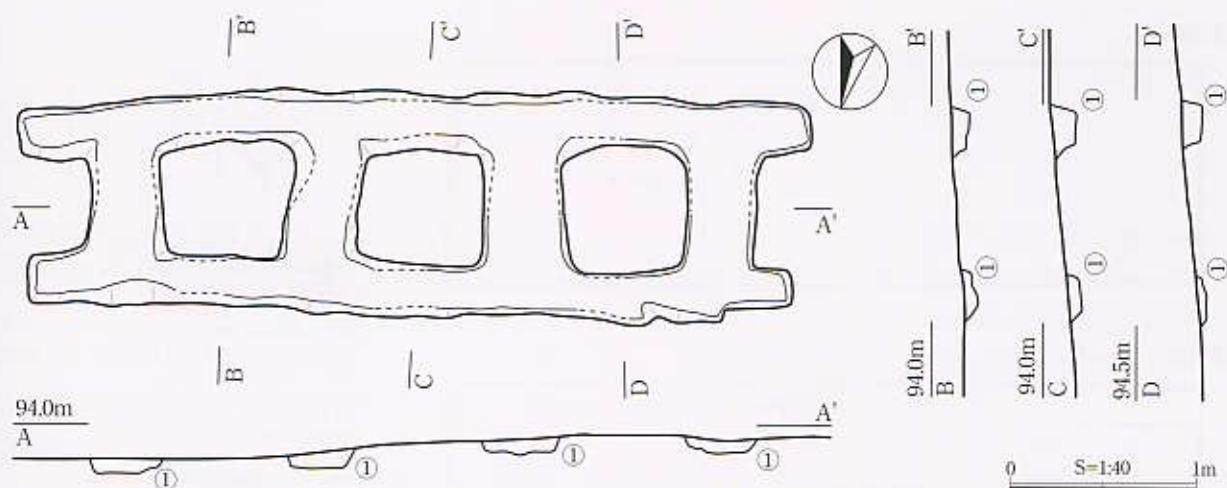
(2) 遺構について

2面の遺構面を確認した。

第1遺構面(図11・図13・表3)

④層上面で検出した遺構面である。現地表面同様に南

から北に向けて緩やかに傾斜しており、南北の高低差は1.8mである。基本的には③層に覆われているが、③層を欠く所では②層に覆われる部分もあった。ピットが散見され、トレンチの中程には平面形が梯子状を呈す遺構(以下、梯子状遺構と仮称する)、トレンチ北端に溝状の



①黒褐色土層(Hue10YR2/2) 粒子は細かく粘土状のブロックを含む。炭化物遺物を含む。T3・③層と区別できない。

図13 トレンチ3 第1遺構面梯子状遺構

遺構が認められる。

トレンチ中央に位置する梯子状遺構(図13)は、幅0.25m程の浅い溝が縦・横に組み合わさって(以下、長軸方向にある溝を縦方向の溝、短軸方向の溝を横方向の溝とする)、梯子状の平面形を構成する性格不明の遺構である。遺構の長軸方向は、等高線に対し斜行しており、一見、梯子状の木製品ないし木製の構造物が包含層中で腐食した痕跡のようにもみえる。縦方向の溝は南西から北東方向に直線的に延びる。長さは4~4.2mである。0.5~0.6mの間隔をあけて、2本の溝が併行する。横方向の溝は長さ0.5~0.6mで、縦方向の溝と直交する。横方向の溝4本が縦方向の溝2本を結ぶことで、四方を溝に囲まれた正方形の空間が形成されている。

遺構の長軸中央と、長軸に直交する方向に土層観察用の畔を設定し、遺構内埋土の掘り下げを進めた。壁はやや外に開くが、立ち上がりは直線的である。また、底面には所々に緩い起伏がみられるが、概ね平坦である。

梯子状の平面形を構成する溝内には黒褐色土(Hue10YR2/2)が堆積していたが、土層断面には溝に対して垂直に立ち上がる木質の痕跡等を確認することはできなかった。底面にも杭や板壁状の木質の存在を示す痕跡は認められない。

埋土中から、土器小片と鉄器小片(図16-2)が出土したが、土器片に時期を特定できるものはない。

なお、第1遺構面の時期については、遺構面を覆う③層がT2・⑨層と対応関係にある可能性が高いことから、古墳時代前期を下限と考えるのが妥当であろう。

#### 第2遺構面(図11・表3)

西側に拡張したトレンチ南半およびトレンチ中央部の西壁に沿ってサブトレンチを設定し、⑤層を掘り下げた。

その結果、⑥層上面で小規模なピットの存在を確認した。部分的な検出で、全体像は判然としないが、遺構面を覆う⑤層が、縄文時代後期中葉の緑帯文土器を含むT2・⑫層に対応することから、T1の第2遺構面に相当すると考えられる。T3・②~④層中から緑帯文土器の小片が出土していることも、第2遺構面の時期について示唆的である。

#### 5. トレンチ4(T4)の調査

妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部から東へ延びる谷に面した、妻木山側の緩斜面に設けたトレンチである(以下、T4)。等高線に直交するように3m×10mの調査範囲を設定した。調査地は南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、現地表面におけるトレンチ南西端と北東端の高低差は約0.8mである。

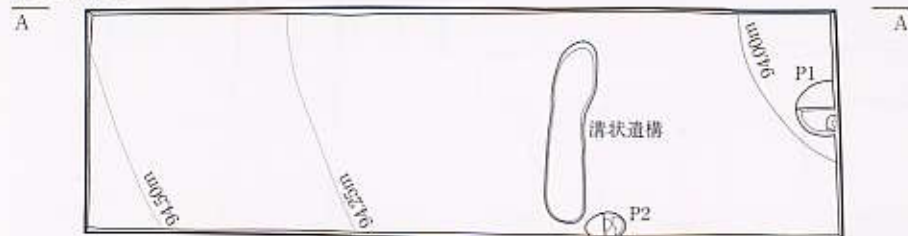
##### (1) トレンチ内の堆積(図14)

調査範囲には約0.3m程の表土が堆積している。表土を剥くと、トレンチ中央からやや北東側に②層(黒褐色土・Hue10YR3/1)が薄く堆積している。②層下に③層(暗褐色土・Hue10YR4/3)が堆積するが、トレンチ北東よりでは③層上を直接表土が覆っている。なお、②層、③層には遺物が少量包含されていたが、時期の特定できる遺物は出土していない。

一方、トレンチ南西側では表土直下に⑤層(暗褐色土・Hue7.5YR3/3)が堆積している。さらに、⑤層下に⑥層(褐色土・Hue7.5YR4/3)、⑦層(褐色土・Hue7.5YR4/6)が、北東から南西にかけて傾斜する⑧層(にぶい黄橙色土・Hue10YR7/4)を覆っており、⑧層は同じく北東から南西にかけて傾斜する⑨層(明赤褐色土・Hue2.5YR5/6)上に堆積している。⑤・⑧層はローム層またはロームの

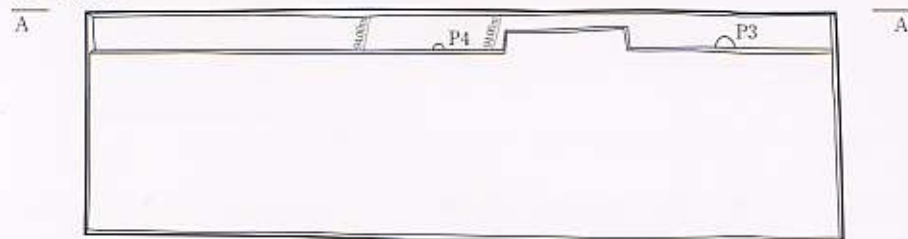


## 第1遺構面



- ①黒褐色土層 (Hue10YR3/2)  
表土。粒子が細かく、ややしまっている。
- ②黒褐色土層 (Hue7.5YR3/1)  
粒子が細かく、軟らかい。
- ③にぶい赤褐色土層 (Hue5YR4/3)  
粒子は細かく、ややしまっている。②を30%程度含む。

## 第2遺構面



- A' ④暗褐色土層 (Hue10YR3/4)  
粒子が細かく、ややしまっている。
- ⑤暗褐色土層 (Hue7.5YR3/3)  
粒子が細かく、ややしまっている。にぶい黄橙色のブロックを10%程度含む。
- ⑥褐色土層 (Hue7.5YR4/3)  
粒子が細かく、ややしまっている。径1~2mmの小石を若干含む。
- ⑦褐色土層 (Hue7.5YR4/6)  
粒子が細かく、固くしまっている。径2~5mmの小石を含む。
- A' ⑧にぶい黄橙色土層 (Hue10YR7/4)  
粒子が細かく、しまっている。炭化物を若干含む。
- ⑨明赤褐色土層 (Hue2.5YR5/6)  
粒子が細かく、ややしまっている。

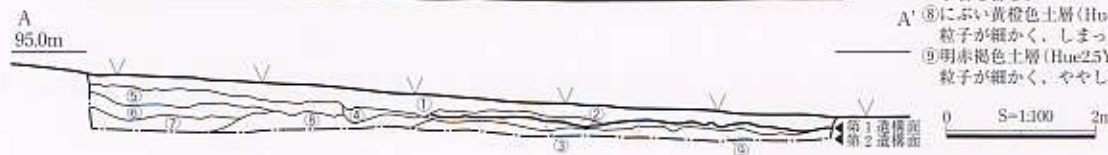


図14 トレンチ4

2次的な堆積、⑥・⑦・⑨層は火山灰層と考えられる。

ところで、トレンチの北東側では表土および②層の下に③層、トレンチ南西側では⑤層が確認できたが、平面的に両者の上下関係を捉えることができなかった。そこで、その関係を明らかにすべく、トレンチ北西壁にそってサブトレンチを設定した。しかし、④層（暗褐色土・Hue10YR3/4）によって、③層と⑤層の重複部分が失われており、その関係を捉えることはできなかった。ただし、⑤層はロームまたはロームの2次堆積と考えられるので、③層よりも下位の堆積である蓋然性が高い。なお、④層は、③層と⑤層および⑧層を掘り込んでおり、断定はできないが、遺構の埋土である可能性がある。

以上、T4の堆積を概観したが、T4には、各トレンチ間の層序の対応関係をはかる鍵層としてきたT2・⑨層・⑩層に対応する堆積が不明瞭で、T2・⑫層にいたっては存在が全く確認できない。さらに、②~④層から出土した遺物は、いずれも時期の特定が困難なものばかりである。したがって、ここでは、土色や土質の類似する堆積の上下関係等を勘案しながら、T1~T3との対応について次のような見通しを示すこととする。

まず、②層は色調・土質の類似からT2・②層と対応関係にあるだろう。次に③層は色調が僅かに赤みを帯びているが、色調が近似することからV-1~3期の堆積であるT2・⑩層と対応関係にある可能性がある。この

ように考えると、T4ではT2・⑨層に相当する時期の堆積が欠落することになる。この堆積の欠如が、人為的な削平によるものなのか、自然の流出なのか、また、本来、堆積が未発達なのか、検討材料が乏しく、判断しかねる。

しかし、鳥取県立博物館が地形の定点観測のため1968年に撮影した航空写真をみると、当時、調査地の周辺は整然と畑地が営まれており、畑地造成の影響を受けていても不思議ではない。

なお、⑤層以下のローム層や火山灰層については、T4の南側に位置する妻木山6区（妻木晩田遺跡第11次発掘調査）で設定したサブトレンチに、よく似た堆積が認められる。このサブトレンチでは火山灰の同定を行っており、⑤層以下の堆積については、次年度以降、その成果をもとに再検討を行いたい。

## (2) 遺構について

2面の遺構面を検出した。

### 第1遺構面 (図14・表4)

表土および②層下、③層上面でピットと溝状の遺構を検出した。トレンチ北東端にかかるピットを半裁したが、非常に浅く、自然の落ち込みかもしれない。溝状遺構はトレンチの中央やや北東よりに位置し、長軸はトレンチにはほぼ直交する。規模は長さ2.4m、幅0.58m、深さ0.05m、遺物は出土していない。なお、第1遺構面の時期は、